

令和6年度 研究概要

<p>所属名</p> <p>カリキュラムセンター</p>	<p>研究会議名</p> <p>国語科研究会議</p>
<p>研究主題</p>	<p>国語に苦手意識をもつ児童生徒が身に付けた資質・能力を自覚化することを目指して —児童生徒の姿を想定した「はじめの一枚」を取り入れた単元づくりをとおして—</p>
<p>資質・能力 目指す 育成を</p>	<p>国語科で身に付けた資質・能力を自覚化できる力の育成</p>
<p>研究内容</p>	<p>言語能力を育成する中心的な役割を担う国語科においては、言語活動を通して資質・能力を育成する。学習指導要領の目標には「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して～」の一文がある。つまりただの言語活動ではなく、言葉による見方・考え方を働かせた言語活動でなければいけない。しかし、研究員の学級の国語に苦手意識をもつ児童生徒に「今まで国語の学習でどんなことをしてきたのか」についてのアンケートをとった際、ほとんどの回答が「スイミー」「やまなし」などの教材名、「スピーチしたよ」「意見文を書いたよ」などの言語活動の回答であった。「気持ちの変化を捉えながら物語を読んできたよ」「資料の効果的な提示の仕方を工夫してスピーチしてきたよ」など、身に付けた資質・能力と教材名や言語活動が合わさった回答はほとんど見られなかった。なぜ、習ってきた教材名や言語活動は自覚しているのに、身に付いた資質・能力は自覚できていないのか。そもそも、授業者が身に付けたい資質・能力を明確にしないで授業に臨んでいるので、国語に苦手意識をもつ児童生徒に適切な手立てをとることができず、資質・能力を身に付けていないことが考えられる。身に付けたい資質・能力を明確にして単元づくりをすれば、国語に苦手意識をもつ児童生徒に適切な手立てをとることができる。またそのことが、学習を振り返る際に、身に付けた資質・能力を自覚化した記述につながるのではないかと考えた。</p> <p>そのための手立てとして、単元づくりのときに、どのような児童生徒の姿が見られると、資質・能力を身に付けたと見なすのか、児童生徒の姿で記述した「はじめの一枚」を作成する。例えば、気持ちの変化を捉えるなら「登場人物の言動が分かる2箇所の叙述とそのきっかけを捉える姿」を「はじめの一枚」に記述する。また、「はじめの一枚」に満たない姿も想定しておく。例えば「登場人物の言動が分かる箇所を1つしか見つけられない」「登場人物の言動が分かる2箇所の叙述は見つけられたが、そのきっかけが分からない」などである。また、想定した「はじめの一枚」に満たない姿に対して事前にその手だてを考えておく。単元において、国語に苦手意識をもつ児童生徒全員が資質・能力を身に付けることができるのか、単元後の振り返りでは、身に付けた資質・能力を自覚化することができるのかを、教師の手立てや児童生徒の振り返りの記述を通して検証することとする。</p>